

1. 前回の講義で言い忘れていたこと(p78-79)

- ・ アンリ・ジョリ『プラトンの逆転 ログス・エピステーメー・ポリス』  
テクネー(技術)のうちのいくつかが、古代ギリシア文化のなかにあらかじめ存在していたことを強調している。  
→フォーコーは、この本の内容に着想を得ていた。

2. 前回からの続き:アルキビアデスの読解の位置づけ(p79-80)

- ・ アルキビアデスの内容…今年フォーコーが話したい内容の導入となるもの
- ・ アルキビアデスにおける「自己への配慮」…完全な理論を示した唯一のテキストではない。
- ・ 自己への配慮の歴史…ソクラテス～キリスト教まで、連続的に再構成するつもりはない。
- ・ アルキビアデスの読解の位置づけ…ギリシア古典期の哲学における導入、その標柱のひとつ  
→テキストの読解を最後まで終えて、特徴的な問題、特徴のいくつかを指摘する

↓

この特徴は、後代になって見いだされるもので、自己への配慮の問題を歴史的な広がりの中で提起することを可能にするものでもある。

3. アルキビアデス後半の内容(p80-86)

- ・ 後半における最初の問題…配慮しなくてはならない自分とは何だろうか?という問題
- ・ 後半の2つめの問題…この配慮とは何をすることなのか?という問題  
→答えはすぐに与えられる。  
→自己へ配慮する=たんに、自分自身を知ること。
- ・ テキストの3番目の言及(自己への配慮にかんする)…<汝自身を知れ>というデルフォイの掟  
→この3番目の言及が、最初の2つとは全く異なった価値・意味を持っている。
  - ① 最初の言及=<自己への配慮>へと導き向かわせようとするもの。単に慎重であれ、というもの。
  - ② 2番目の言及=方法論的な疑問。配慮しなければならない自己って何?デルフォイの掟の引用。
  - ③ 3番目の言及=自己へ配慮するとは何?を考えている箇所。  
→その中で、自己への配慮=自己の認識に存するものでなくてはならないという考えが出てくる。

*自己自身を知るためにこそ、自己のなかに閉じこもらなくてはならない。自己自身を知るためにこそ、私たちが欺く感覚から自らを切り離さなくてはならない。自己自身を知るためにこそ、魂を動かさないようしっかりと固定し、あらゆる外的な出来事に影響されないようにしなくてはならない。自己自身を知るために、そして、自己が知られるまさにその限りにおいてこそ、こうしたことは行われなくてはならないし、行われることができる。したがって、「汝自身を知れ」を中心として、これらの技術は全面的に再編されることになるでしょう。(p81, 18-13)*

→自己への配慮の空間が開かれ、自己が魂として規定されるやいなや、そうして開かれた空間全体が「汝自身を知れ」という原則によって覆われることになった。=自己への配慮によって開かれた空間の<汝自身を知れ>による武力制圧。

↓フォーコーの考えでは…

近代哲学が、<汝自身を知れ>を強調し、それによって自己への配慮を多少なりとも忘却させ、なおざりにし、周縁化するようになったのではないか？(p81-82)

- ・ 汝自身を知れ・自己への配慮の関係性…汝自身を知れが従属的な役割しか持たなかった、というわけではない。言いたいのは、<汝自身を知れ><自己への配慮>の倒錯があるということ。

例：ソクラテスがアルキビアデスに「少し自分のほうを見たほうが良い」と注意した時アルキビアデスは、「たしかに、自己を配慮するべきだ」と言った。

さらに、ソクラテスは「配慮しなくてはならないこの自己自身をよく知らなくてはならない」と言う。

→配慮が何に存するのを見ようとするところで、<汝自身を知れ>が再び登場。

=汝自身を知れ、自己への配慮が力動的に絡み合い、相互に呼び合っている！

→この絡み合いこそ、重要。

- ・ テキストで3番目の言及点…自己へ配慮すること=自己を知ることだとして、自己はどうすれば知ることができるのか、知は何に存するのか？という問題が出てくる。

↓知に関する記述をみていくと…。

- ・ 眼の比喩…知られるべきは魂だとすると、魂をどうやって知るか。それを説明する例としては、眼が最適。
- ・ 眼が見られうる条件と方法…眼が鏡によって送り返されてくる自分の像を知覚するとき
- ・ 自分の像…反射面になるのは、鏡だけではない。誰かの眼は、自分自身を見ている。その眼差し=自分が何たるかを知ることができるための条件であり、反射面になる。
- ・ 誰かの眼によって知覚する自分…眼は眼のなかに自らを見るのではない。眼は自らを、視覚の原理のうちに見て取る。眼が自らを把握することができるようにする視覚行為は、他者の眼のなかに認められる視覚の行為の中ではじめて実現しうる。

↓これが、魂という考えに適用されると…

- ・ 魂…その視線を自分と同じ性質を持つ要素へと向けることではじめて自らを見る  
=魂の本性、すなわち、思考と知(to phronein, to eidenai)をなす原理そのものへ視線を向けることではじめて自らを見る
- ・ 自分と同じ性質を持つ要素…神的な要素
- ・ 神的な要素について、一連のやり取り(p83-p84)。

ソクラテスの問いかけ：「本当の鏡が、眼の鏡よりもくっきりと像を結び、純粋で明るいのとちょうど同じように、神は私たちの魂の最良の部分よりもさらに純粋で明るいのではないか」

アルキビアデスの返答：「そのように思われます。ソクラテス。」

ソクラテス「ということはつまり、神をこそ見なくてはならないのではないか。神は、魂の質を判断しようとする者によって、人間的なことからそのものの最良の鏡であり、したがって神において、私たちは私たち自身をもっともよく見、そして知ることができるのだから」

→このやり取りにおいて、最良の鏡=眼よりも純粋で明るい鏡と言われている。

→神の魂は私たちよりも明るい、ゆえに、神をみれば自分の魂がよりよく見えるのでは？

=神的なものの認識は、自己認識の条件、となる。

- ・ 知恵…魂が神的なものに触れ、これを捉え、神的なものという思考と認識の原理を考え認識することができるようになると、知恵を授けられる。その瞬間に、魂はこの世に戻ってくる。

→魂は善悪判断を可能にし、適切に振舞うことができるようになり、それによって都市を統治できるようになる、という構図。

→だから、自分たちが統治できるということ、そしてこの上昇と下降の運動を行った者が、自分の都市の

すぐれた統治者となりうるといえる。

- ・ アルキビアデスの約束・・・ソクラテスに対して、対話篇の終わりで1つの約束をする。  
→正義に配慮しよう。という約束。  
→自己へ配慮すること＝正義に配慮すること

#### 4. 対話篇の成立年代について(p86-92)

- ・ 成立年代に対する議論・・・若干問題があるのではないかと、言われている。
- ・ 『ランフォルマシオン・リテール』の論文・・・対話篇の成立年代についての問題を総括し綿密に説明。
- ・ 対話篇・・・後の時期に成立したのでは？と示唆される要素(＝外的要素)がいくつかある  
例:スパルタのくだり、ペルシャの記述など  
→フーコーにとっては、成立年代という点で興味深いものだった。  
→年代的にいつて奇妙なテキストであり、プラトンの仕事すべてを横断しているものだから。

↓

→プラトン哲学のあらゆる方法の見取り図が見られるテキストだった。

↓ギリシア・ローマの思想史でもみられる、いくつかの問題を取り出してみることができる

- ・ 問題1 つめ・・・政治行動への関係  
自己に配慮することは統治者の特権であったのに、一般化され、「すべての人」にとっての至上命題として移り変わっていく。  
※ただし、自己に配慮するためには2つの大きな制限がある。  
① 自己に配慮するには、そのための能力や時間、教養を持っている必要がある。  
→エリートの嗜みだということ。  
② 自己へ配慮する個人を、大衆・多数派・日常生活に埋没した人と別の者にすること  
→道徳的エリートでないと、自らを救う者になれないということ。
- ・ 問題2 つめ・・・自己への配慮と教導の問題  
重要なものは、年齢。自己への配慮が必要となるのは壮年期。大人が自己に配慮するのは、老年に備えるため。老年の準備としての自己への配慮が、教導の代替物＝生に備えるための共同の補完物としての自己への配慮から分離していく。
- ・ 問題3 つめ・・・少年愛の関係。  
プラトンでははっきりしているが、ヘレニズム・ローマの時代になると、自己の技術と自己の淘汰のなかに消えてしまう。  
→これら3つは、常に存在するが、時代によって中身の変遷が生じている。その変遷が古典期以降の自己への配慮の歴史を構成している。
- ・ アルキビアデスが証言し先取りしているもの・・・自己への配慮の全般的な歴史ではなく、それが取る厳密にプラトンの形式。

↓

- ・ プラトンの形式とは？・・・3つ特徴がある。  
① 自己への配慮が、自己認識のなかにその形式ないし完成を見ているという点  
② 自己への配慮の主要かつ至上の表現である自己認識が、真理へ、真理一般へすすむ道を開くという点  
③ 真理への到達が、同時に自己のうちにありうる神的なものを認めることを可能にする点
- ・ プラトン主義の逆説・・・プラトン主義は、様々な霊的運動を生み出した誘因であった。プラトン主義は、認識と真理への到達を、ただ自己認識から、自己自身における神的なものの再認であるような自己認識から出

発してのみ考えていた。認識・真理への到達は、自分自身および神的なものへと関わる魂の霊的な運動を条件として初めてなされるもの。魂が神的なものに関わるのは、魂が自分自身に関わるからで、魂が自分自身に関わるのは神的なものに関わるからという図式(=真理に到達するための図式)がある。その一方で、「合理性」が発展する風土においても、プラトン主義は存在していた。

→プラトン主義は、純粋な認識の運動が発展した風土であった。そして、古典古代の文化とヨーロッパの文化を通して、真理へ到達するために必要な霊性の諸条件を、たえず繰り返す立ると同時に、霊性を認識運動に、つまり、自己、神的なもの、さまざまな本質の認識の運動に吸収することになった。

- ・ 次回…別の歴史的時期、エピクロス派やストア派における<自己への配慮>の問題を検討する。

## 5. H松の疑問

- ・ 自己への配慮が、自己(自分というもの)がどのような人間なのかという認識と繋がることで、「正しい」自分を認識するために欠かせない歪みのない鏡としての神という概念が出てきたこと、さらに神を認識できたことが知恵(知)の有無を示すことだという構造はよく分かった。ただ、(そんなことを言うと、キリスト教を信じている方にはとんでもない！と言われそうですが)自分を正しく知れる=真理を見せてくれる鏡としての神が目に見えない以上、「正しさ」の基準もあいまいにならざるを得ず、「正しい」「本当の」自分を探し続ける生き方を強制されてしまう構造も現在にはあるのではないかと思いました。
- ・ 【本文の内容を離れた雑談】誰かの眼(=眼差し)の話を読むたびに、自分の研究で見聞きした障害者雇用・就労系のイベントで求められる「正しい障害者」像を思い出してしまいます。例えば、こんな話を聞きました。市役所主催の福祉バザーはお金に繋がるし人と繋がる機会になっていいけれど、普段お店に立っている時は普通に接客しているメンバーが、市役所の店頭立つ時にはわざと舌足らずな接客をするようになって、本人も無意識のうちに絵に描いたような知的障害者を演じるようになってしまい、はたから見ている支援員として「果たしてこれは自律なのか？」と違和感を持つそうです。その団体では、「そんなの自己欺瞞・自己憐憫じゃないのか」と思って、金になる市役所バザーはやめてしまったとのことでした。自分はどうかあるべきなのかと思うことで、かえって、他人が求める像(正しいとされる自分の姿)に依存し、自分というものを失うという危うい構造が自己への配慮にはあるのかなと、こういったエピソードを振り返ると思ってしまいます。